

"Glimpses of Unfamiliar Japan"

Patric Lafcadio Hearn



NHKテレビ・シナリオ

日本の面影

山田太一

日本放送出版協会

著者紹介

昭和9年、東京浅草に生まれる。昭和33年早稲田大学卒業。松竹大船撮影所演出部を経て、現在シナリオライターを主業とする。作品に「パンとあこがれ」「獅子の時代」「それぞれの秋」「岸辺のアルバム」「あめりか物語」「想い出づくり」「男たちの旅路」「ふぞろいの林檎たち」など。それらによって、芸術選奨新人賞、テレビ大賞、放送文化賞他を受賞。著書に『昼下りの悪魔』（エッセイ集）『終りに見た街』（小説）などがある。

NHKテレビ・シナリオ

日本の面影

定価 一、二〇〇円

昭和五十九年三月三日 第一刷発行

著者 山田太一

発行者 藤根井和夫

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四一

郵便番号 一五〇

振替 東京一四九七〇一

編集協力 内館牧子／筒井雅之

印刷所 理想社／大熊整美堂 製本所 石津製本

検印廃止

©1984 Taichi Yamada Printed in Japan

ISBN 4-14-005115-9 C0093 ¥1200E

（落丁本・乱丁本はお取り替えいたします）

日本の面影

Glimpses of Unfamiliar Japan

装帧
蟹江征治

目次

第一回 ニューオーリンズから――7

第二回 神々の国の首都――59

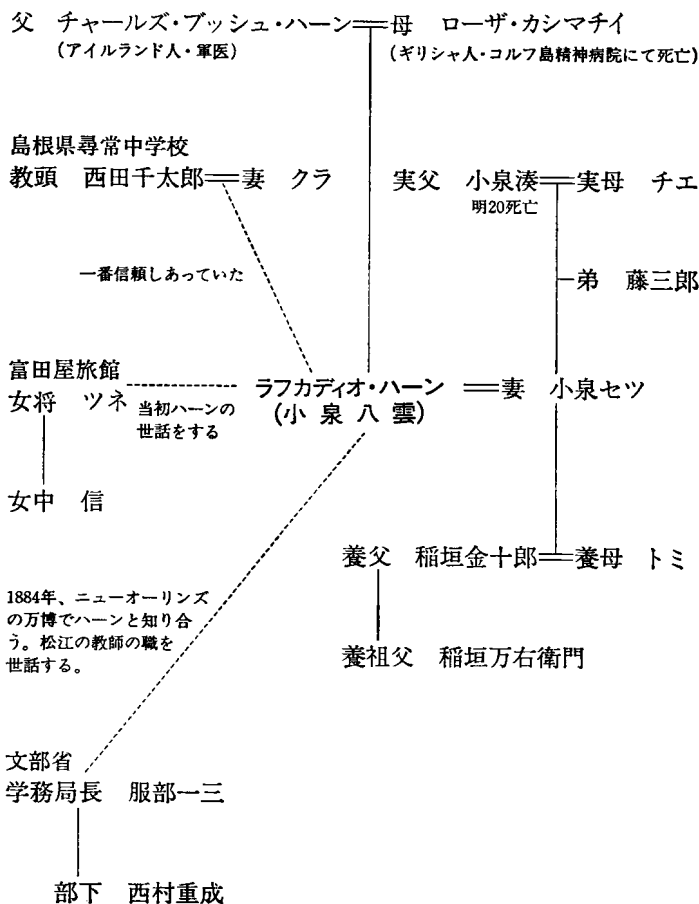
第三回 夜光るもの――111

第四回 生と死の断章――161

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）年表――211

座談会「百年目の今……」――221

《ラフカディオ・ハーンをめぐる人々》



* 放送記録
NHK総合テレビジョン、昭和五十九年三月三日、
十日、十七日、二十四日の土曜午後八時より放送。

●スタッフ

音楽	池辺 晋一郎
制作	原 駿 二
演出	中 里 毅
技 術	中 村 克 史
美 術	音 成 正 人
効 果	八 城 徳 治
カメラ	小 川 論
照明	小 林 喬
音 声	浜 口 淳 二
広 報	奥 村 重 喜
	川 原 崎 賢 明
	長 谷 川 忠 昭
	川 端 正 道

●キャスト

ラフカディオ・ハーン (小泉八雲)	
ジョージ・チャキリス	
小泉セツ	檀 ふみ
服部 一三	津川 雅彦
西田 千太郎	小 林 薫
西田 クラ	樋口 可南子
小泉 藤三郎	柴 田 恭 兵
チエ	佐々木すみ江
稲垣万右衛門	加 藤 嘉
金十郎	佐 野 浅 夫
富田 ツネ	加 藤 治 子
池 田 信	杉 田 かおる
佐久間 信恭	伊 丹 十 三

第一回 ニューオーリンズから

ある家の表（夜）

ニューオーリンズ。

フレンチ・クォーターの一角。酔った水夫らしい初老の男が、おぼつかぬ足どりで歩いて行く。他に人影はない。

スーパー 「一八八四年（明治十七年）」

三月。

家々の二階は、それぞれに装飾的なヴェランダを持っている。

スーパー 「ニューオーリンズ」

遠くで、まるで詩の一行のように男の名を呼ぶ酔った女の声が聞こえる。

その鎧戸の部屋

若い娘の部屋である。

しかし、娘はいない。

四十五、六の父親がランプを持って立っている。

そばに、案内をされてこの部屋へ入ってきたラフカディオ・ハーン（34）が立っている。

父親「歳よりは老けて、疲れている。娘のベッドを見つめ」このベッドで娘は死んだ。十三歳だった」

ハーン「（うなずく）」

父親「四か月になる」

ハーン「（うなずく）」

父親「机も椅子も、カーテンも、ピアノも、なにひとつ動かしていない」

しかし、あたりは寝しずまっている。

その家のヴェランダに面した鎧戸もびたりと閉じられている。

中でランプの灯りが動く。

ピアノには、カバーがかかっている。

父親「——（静かに廊下へ）」

ハーン「（続く）」

廊下

父親「持ってくれますか？（とランプをハーンにさし出

す）」

ハーン「ええ（と持つ）」

父親「（鍵を手を持ち、娘の部屋のドアに鍵をかけなが

ら）メイドは怖がって出て行ってしまった」

ハーン「（ランプをかざしている）」

父親「（身を起こし）新聞記者だといったね？」

ハーン「ええ」

父親「幽霊が記事になるかね？」

ハーン「なります」

父親「気のせいだなんて、書くんじゃないだろうね」

ハーン「お嬢さん次第です」

父親「（悲しい目でうなずき、向かいの部屋のドアをあ

け）この部屋で待ちなさい」

ハーン「ありがとう（と入る）」

父親「（続いて入って行き、ドアを閉める）」

しんとした廊下。

湧き上がるように水音が起こり――。

ミシシッピー河（昼）

快晴。

外輪船が水を蹴立てている。

水音の中からプラスバンドの音楽盛り上がり、

フレンチ・クォーター

万国博覧会参加のメキシコのプラスバンドが

行進する。

幽霊など入る余地のない明るい街路。

立ち止まる人々。

バンドといっしょに行き子供たち。

花々。

笑う顔。

日本の伝統民具

ブラスバンドの音楽は続いて――。

メイン・タイトル 「日本の面影」

フレンチ・クォーター

行進するブラスバンド。

人々。

クレジット・タイトル 「第一回ニューオー
リンズ・万国博覧会」の幔幕。スーパード示
す。

日本の伝統民具

ここにもクレジット・タイトル。

フレンチ・クォーター

ブラスバンド。

クレジット・タイトル。

ジャクソン・スクエア

日本政府事務官、服部一三と従者、西村重成
が立っている。

服部は日本代表として身構えたところがある。
西村はアメリカへ同化したような気振りをし
たがるところがある。

クレジット・タイトル。

日本の伝統民具

フレンチ・クォーター

クレジット・タイトル終わる。

ある家・父親の部屋（深夜）

父親とハーン、椅子に腰掛けている。

父親「ワイングラスを持っていて、そのグラスが空なの
に気がつき、ハーンを見て」どうだね？ もっと」
ハーン「まだかなり残っているグラスを持っています」

ああ、あります、まだ」

父親「うむ（とテーブルの瓶をとって、自分のグラスに
注ぐ）」

娘の部屋の方で、なにかが倒れる音。

ハーン「その方を見る」

父親「手を止めている」

ハーン「（父親を見る）」

父親「娘だ（と瓶を静かに置く）」

ハーン「（立ち上がる）」

父親「（静かに）椅子を倒した」

また音がする。

連続して床を叩くような音。

父親「（可愛い、という気持で）ベッドを（と立ち上が
り）揺すっている」

ハーン「（その部屋の方へ行っているものかどうか、ド
アを見、父親を見る）」

父親「（ドアを見つめている）」

ハーン「（ドアを見る）」

しんとしてしまう。

父親「（次の音を期待するようにドアを見ている）」

ハーン「（その父親を見る）」

ポンと指一本でピアノを弾く音。

ハーン「（ハッとする）」

父親「（哀惜溢れて）娘が弾いている（とゆっくりドア
へ）」

ピアノの音、聞こえている。

まだたどたどしい。

父親、ひきこまれるように廊下へ。ハーン、

続く。

廊下

父親「（哀惜の顔でドアを見つめる）」

ハーン「（ドアを見る）」

ピアノ、指一本ながら、段々にうまくなり、
テンポも早くなる。

初歩の練習曲のようなものである。

父親「（涙）毎晩——これを楽しみにしている」

ハーン「（低く）ドアを——ドアをあけてはいけませんか？」

父親「——（ただドアを見つめている）」

ハーン「部屋の中が見たい」

父親「（胸ポケットから鍵を出し、ドアを見つめたまま、

ハーンの方へさし出す）」

ハーン「（その鍵をとって、ドアへ行き、音をひそめな

がら、急いで鍵をさし込む）」

ピアノ、大きく、テンポ早く聞こえている。

ハーン、鍵をあげ、ドアをあける。

ピアノの音、ぴたりと止まる。

若い娘の部屋

しんとしている。

ピアノは、カバーがかかったまま。椅子が倒れている。

ハーン、呆然としている。

父親、毎夜のこととて、ただ涙のまま、おだやかに立っている。

ベーカールの声「また幽霊か」

「タイムズ・デモクラット」社・オフィス（昼）

ベーカー「（ページ・ベーカー。主筆）幽霊が音をたてる。よくある話だ」

ハーン「話じゃあない、事実です」

ベーカー「いいかい？ 今は科学の時代だ。新聞が、そんな怪し気な記事を扱うべきではないし、扱いたくもない」

ハーン「私が体験したことです。おのぞみなら、あなたも体験したらいい」

ベーカー「一向におのぞみじゃあないよ。新聞は、そういう迷信を打ちこわすためにあるんだ。記者が、こんなことに夢中になってどうする？」

ハーン「事実だからです」

ベーカー「ハーン！ どうやって、そんなものを信じろっていうんだ？ 君はヴァードゥーにも首をつっこん

でいる。ワラ人形を使って人を呪えなんて、そんなことを新聞がどうやって書ける？」

ハーン「誰もそんなことをいっていません」

ペーカー「あの音楽（スコットランドの民俗音楽）が聞こえないか。今は幽霊どころじゃない。世界中の国から」

街のスケッチ

各国の人々が、あるいはゆったり、あるいは忙し気に、歩いているのを、スナップ・ショットのようにモニタージュして、

ペーカーの声「大勢の人間がニューオーリンズへ集まっているんだ。博覧会場へ行ってきたまえ。ホンジュラス、ジャマイカ、日本、ベルギー、フランス」

「タイムズ・デモクラット」社・オフィス

ペーカー「君の文才をもってすれば、いくらでも面白い記事が書けるはずじゃないか」

ノック。

ペーカー「（すかさずドアへ）なんだい？」

もうドアがあいていて、マルディ・グラス（ニューオーリンズの祭り）に使う仮面を顔にあてて、

ビスランド「（女性記者。エリザベス・ビスランド。つくった低い声で）川から声が聞こえたわ。（と笑って仮面をとりながら入ってきて）知事の挨拶を聞いていると、ルイジアナほどいいところはないような気がするわ」

ペーカー「そのとおりさ、エリザベス。ニューヨークのどこがいいのか分からないね」

ビスランド「知事のパーティーの招待状と、私の記事です。目を通していただけますか？」

ペーカー「いいとも」

ビスランド「こんにちは、ラファディオ」

ハーン「ああ（ペーカーに）失礼（といつて出て行こうとする）」

ビスランド「ラフ」

ハーン「（振り向き）うん？」